

# Glocal Tenri



12

月刊 グローカル天理 Monthly Bulletin Vol.23 No.12 December 2022

天理大学 おやさと研究所 Oyasato Institute for the Study of Religion, Tenri University

## CONTENTS

- ・巻頭言  
ネイティブ宗教学としての天理教学  
／井上 昭洋 ..... 1
- ・文脈で読む「身上さとし」(4)  
増野正兵衛：おさづけを戴くまで②  
／深谷 耕治 ..... 2
- ・伝道と翻訳—受容と変容の“はざま”  
で— (38)  
天理教教義翻訳の諸相⑤  
／成田 道広 ..... 3
- ・イスラームから見た世界 (22)  
カイロの日常—天理参考館の現代エジプト展—  
／澤井 真 ..... 4
- ・音のちから—中国古代の人と音楽 (11)  
鳥の言葉がわかる？  
／中 純子 ..... 5
- ・ヴァチカン便り (59)  
「世界平和の祈りの会」の閉会式で講話  
／山口 英雄 ..... 6
- ・ニューヨーク通信 (15)  
アメリカの中間選挙  
／福井 陽一 ..... 7
- ・思案・試案・私案  
「碍」の字表記問題再考 (22)  
仏教にみる障害者像  
／八木 三郎 ..... 8
- ・2022 年度公開教学講座要旨：『逸話篇』  
に学ぶ (8)  
第3講：139「フラフを立てて」  
／岡田 正彦 ..... 9
- ・2022 年度公開教学講座要旨：『逸話篇』  
に学ぶ (8)  
第4講：108「登る道は幾筋も」  
／八木 三郎 ..... 10
- ・図書紹介 (132)  
Friedrich von Schelling 著 深谷太清  
他訳  
『〈新装版〉シェリング著作集 第2巻  
超越論的観念論の体系』  
／堀内 みどり ..... 11

日本南アジア学会第35回全国大会に参加／2022年度第2回伝道研究会(10月20日)／宗教倫理学会第23回学術大会に参加

## 巻頭言

## ネイティブ宗教学としての天理教学

おやさと研究所長 井上昭洋 Akihiro Inoue

文化人類学では、文化を解釈する時の異なる枠組みについての議論が時に応じてなされてきた。実証主義と解釈主義、エティック(etic)な視点とイーミック(emic)な視点、「経験に近い(experience-near)」概念と「経験に遠い(experience-distant)」概念といったペアの用語が指し示すのは、文化の解釈における認識論的問題であったと言える。

エティックとイーミックの概念は、音韻論の音声的(phonetic)と音素的(phonemic)の対立概念を文化現象全般に当てはめたものである。エティックな視点は、どの文化にも適用できる概念を用いて、文化を外側から客観的に分析し、異文化間の比較を可能にする。イーミックな視点は、当該文化固有の概念を用いて内側から文化の意味体系を分析する。一方、「経験に近い・遠い」概念とは、解釈人類学者のギアーツの提唱した対立概念である。経験に近い概念とは、例えば、病人が自分の感じたことを言い表すためにごく自然に用いる概念(痛みや不安)であり、経験に遠い概念とは医師や宗教家が自らの目的を達成するために用いる概念(診断や悟り)である。ここで解釈人類学が目指したのは、両概念の対立を乗り越えて、そのいずれにも回収されない形でより良い文化解釈を行うことであった。

これらの対立概念が指し示すのは、解釈する者がどのような場所から対象に対して視線を投げ掛けているのかという問いであると言っても良い。この認識論的問題は、近年のネイティブ人類学の動向とも関連している。ネイティブ人類学とは、それまで調査される側であったネイティブが、人類学の領域において、自らの言葉で自らの文化を語ろうとする動きである。インフォーマントの立場に陥ることなく(調査者と被調査者というコロナルな権力関係は頑強なものである)、ネイティブ

であることを放棄せずに(西洋の学問的言説を身につけることでネイティブの視点を失う危険性は常に存在する)、自らの文化について自らの言葉で語る作業は、想像以上に困難なものだ。自文化の解釈と翻訳において、ネイティブであり人類学者であるという困難性を認識し、それを乗り越える作業が、ネイティブ人類学の確立には不可欠なのである。

天理教学が今のところネイティブ(天理教の信仰者)が自らの所属する文化(天理教)について研究する「学問(ディシプリン)」であるとするならば、それが誕生の時からネイティブ人類学の抱える困難性と同種の困難性を内包していたはずである。ならば、天理教学においても、非信仰者のエティックで経験に遠い視点と信仰者のイーミックで経験に近い視点という相対する枠組みを操作的にでも設定し、両者の背反性を乗り越える理論の構築が試みられるべきだろう。

ところで、私は、この度おやさと研究所長に就任し、しばらくの間、天理大学国際学部の学部長と兼任することになった。専門は文化人類学で、地域としてはポリネシア、特にハワイについて研究してきた。天理教についての書き物もあるが、天理教学プロパーの研究者ではない。しかし、一信仰者として天理教を研究する時、天理教信仰者であり人類学者であるという自分の研究者としての立ち位置について自省的でありたいと思う。かつて「元初まりの話」の表象論を論じたこともあるが、天理教学における認識論的問題を指摘したものの、詳細な論考は棚上げにしたままだった。この度の就任により、「ネイティブ宗教学」としての天理教学の可能性について考える機会を与えられたと考え、そのテーマでしばし巻頭言を書き連ねたいと思う。

## 増野正兵衛：おさづけを戴くまで ②

天理大学人間学部講師  
深谷 耕治 Koji Fukaya

明治20年3月25日(陰暦3月1日)に、飯降伊蔵は本席に定まった。それからの「おさしづ」の主なテーマの一つは、おさづけを渡すことである。『教史点描「おさしづの時代、をたどる」』には明治20年におさづけを渡された人々が一覧で掲載されており、それを見ると増野正兵衛は比較的早い明治20年5月14日に戴いていることが分かる。

前回に引き続き、その流れの中で正兵衛が戴いた「おさしづ」を確認していこう。

5月14日のおよそ3週間前の明治20年4月24日5時半、正兵衛は自身の身上の障りから「おさしづ」を伺っている。ここでは「席というは綾錦」などと本席の立場についてふれられており、その上で、「ほんに席さしづは仕事場。何時にても、どうい事も早く」と本席の役割が果たせるよう急がれていることが読み取れる。

それからおよそ2週間後の5月10日には妻のいとうが「裏向き通じ悪しき」について「おさしづ」を伺っている。そこでは「先々案じあるから、自由自在一寸身の内の所不足出来る」と諭されている。おそらく、おぢばに移り住むことについての「先案じ」ではないだろうか。

正兵衛も2日後の5月12日「足だるみ」「胸痛む」という身上について伺っており、「心に掛かるから身に掛かる」という似たようなお言葉を戴いている。

また、正兵衛は次の日には「耳鳴り」で伺っている。ここでは、まず「ついで、は、心胆さしづ出来ぬ」というお諭しを受けている。「さあ取次一人引いて又一人、めんへ一人限り話聞く」というお言葉から察するに、ある人に対する「おさしづ」が終わる前に次の人の伺いを始めたというようなことがあったのだろう。ここでは「おさしづ」の聞き取り方について「ついで」ではいけないと注意を受けている。その上で、正兵衛の身上に関しては、「内々それへ談示、安心一寸残りの処身上尽する」と内々の談し合いについてのお言葉と、「…身の処これだけ前生いんねんなれど、聞くに聞かれん。心たんのうせ」と前生いんねんに関するお言葉を戴いている。

そして、翌5月14日の午前9時、真柱の眞之亮の立合いのもと、正兵衛は「あしきはらひたすけたまへ天理王命」のおさづけを戴く。

前回に引き続き、明治20年3月27日(陰暦3月3日)午後4時「増野正兵衛身の障り伺」から、おさづけを戴く同年5月14日の「おさしづ」を通してみると、本席の役割であるおさづけを渡すことや取次人も含めてそのお言葉を軽々しくしないことなど、教祖が現身を隠されて後の本席の立場やその意義を明確にするという流れがまずあり、その上で、増野家に関しては正兵衛がおぢばで御用を勤めることや、そのことを内々の者がしっかり承知することなどが諭されていることが分かる。それでは、次に、このような文脈をふまえて正兵衛の身上について考えていきたい。

## ○「胸痛」「耳鳴り」

まず、『身上さとし』では、「胸痛」の項目で、明治20年5月12日(陰暦4月20日)「増野正兵衛足だるみ胸痛むに付居所の伺」の「おさしづ」が扱われている。その解釈としては、次のように述べられている。

心にかかるから身上になる。寝て目がさめれば心にかかる。心にかかるのが神の邪魔になる。すっきり心にかからんようにしたら安心であろう。という意味で、胸痛は心にかげず、神意に添うようにと指示しておられるのであろう。

また、「耳鳴り」の項目で、明治20年5月13日(陰暦4月21日)「増野正兵衛耳鳴るに付伺」の「おさしづ」が扱われており、次の

ように述べられている。

おさしづのついでに身上さとしをたずねてはいけない、ちゃんと一人の話がすんでしまってまた一人というようにせよ。聞くにきかれんことがあっても、前生いんねんとたんのうせよという意味で、耳鳴りは、おさしづをよくきくように、また聞きにくいことを聞いても不足してはならないと指示していられるのであろう。

先に記したように、増野正兵衛がこの頃戴いた「おさしづ」の文脈を鑑みると、『身上さとし』の「胸痛は心にかけず、神意に添うように」というのは、正兵衛にとっては、具体的にはおぢばに移り住むこと(居所)が大きなテーマであったと考えられる。また、それはたんに正兵衛だけの問題ではなく、内々がしっかりと談し合い、心をそろえるということでもあった。その意味で、「胸痛」には、「内々の者たちでしっかり話し合って心を通わせる」という意味合いも含まれていよう。

ただし、5月12日の「おさしづ」では「胸痛む」と同時に「足だるみ」ともあり、全身に何か倦怠感のようなものもあったのかもしれない。目覚めのときから心に掛かるような先案じの心が、そうした全体的な身の障りとして現れていたとも考えられる。

また、『身上さとし』では「耳鳴りは、おさしづをよくきくように」とあるが、正兵衛に関していえば、取次の立場であったことも見過ごしてはならないだろう。飯降伊蔵は、教祖ご在世の頃から神の言葉を取り次いでいたとはいえ、本席という立場に就いたのは、この時点ではまだ日が浅い。また、本席の「おさしづ」を書き取っていくという体制もまだ十分ではなかった。こうした点を考えると、「耳鳴り」は「理の話を取り次ぐ態度を養う」という意味合いもあるのではないだろうか。

また、「聞くにきかれんことがあっても、前生いんねんとたんのうせよ」とも解釈されている。人間には前生のことは正確には分からず、生まれる前からの流れを得心することは容易ではない。しかし、この「おさしづ」の文脈を考えると、聞きにくいことを聞くためには、まずは本席の言葉の受け取る態度が肝要だと考えられる。そして、正兵衛の身の障りは次の日も続き、神意を伺ったところ、「あしきはらひたすけたまへ天理王命」のおさづけが渡された。身上の障りを通して、神の御用をつとめる「ようぼく」へと導かれていく様が読み取れる。おそらく、そうしたプロセスを通して、前生いんねんとたんのうすることも可能になってくるのではないか。

さて、正兵衛は、2日後の明治20年5月16日にも自身の身上の障りから「おさしづ」を伺っている。また、それから4日後の5月20日、さらに6月末には2件、7月には断続的に7件「おさしづ」を伺っている。とくに7月4日の「おさしづ」では「身の処日々身の障りだんへあちらこちらへ変わる」とあり、また7月23日の割書きには「増野正兵衛体内あちらこちら疼くに付伺」と記されていることから、正兵衛には身体のいろいろな箇所障りがあったことが窺える。「身上さとし」という観点から言えば、「頭痛」や「腹痛」などの器官ごとの分け方では捉えにくい身上の障りが多いことは確認しておきたい。

[註]

- (1) 天理教道友社編『教史点描「おさしづの時代、をたどる」』天理教道友社、2012年、20頁。
- (2) 『教理研究身上さとし—おさしづを中心として』天理教道友社、1962年、142頁。
- (3) 同書、78頁。

## 天理教教義翻訳の諸相 ⑤

## 昭和期(戦後)の教義翻訳1

昭和27(1952)年1月1日、布教部内に海外伝道部が再設置され、松井忠義布教部長が海外伝道部長及び翻訳課長を兼任することになった。その後、昭和28(1953)年1月からは岸勇一天理大学長、昭和31(1956)年12月からは諸井慶徳天理大学宗教学科長がそれぞれ翻訳課長を兼任した。昭和36(1961)年5月には教庁機構改革に伴い翻訳課は一旦廃止されたが、昭和45(1970)年4月、海外伝道部内に翻訳班(井上昭夫主任)が設置された。他方、昭和43(1968)年11月に、海外伝道部と天理大学の賛同のもと、関係者有志により天理教教義翻訳研究会(井上昭夫代表)が設立された。

各言語の翻訳出版は着実に成果を挙げ、昭和36(1961)年12月発行『海外伝道部報』第48号によれば、それまでに「おふでさき」、「みかぐらうた」、『天理教教典』、その他教理書など50を超える翻訳書籍が、英語、中国語、朝鮮語、ポルトガル語、スペイン語、フランス語、ロシア語、インドネシア語で出版された。中でも、「おふでさき」全号の翻訳として、昭和36(1961)年に初めて出版されたのが *Ofudesaki, The Holy Scriptures* (Tenri: Tenri Jihōsha, 1961) である。訳者は外国語学校開校当時の英語教員、吉田清一天理大学教授である。吉田はそれ以前、最初の試訳を昭和21(1946)年4月発行の『復元』創刊号から昭和22(1947)年7月発行の『復元』第七号で発表している。「おふでさき」の英訳に関しては、のちの昭和46(1971)年に初めて教会本部から出版され、昭和51(1976)年、58(1983)年、60(1985)年、平成3(1991)年、6(1994)年と改訂が重ねられ現在に至っている。その初版出版の年には、教義翻訳研究会発行の『翻訳』第7号でもおふでさき試訳が発表され、その後、昭和62(1987)年には井上昭夫訳の *A STUDY OF THE OFUDESAKI—The Original Scripture of Tenrikyo—* (Japan: Tenrikyo Doyusha, 1987) も出版された。

昭和期の教義翻訳において重要な役割を担った人物の一人が上述の井上昭夫である。井上は翻訳班主任及び教義翻訳研究会の代表として、教義翻訳全体をけん引する傍ら、自ら「おふでさき」の英訳を手掛け、原典翻訳に関する論考も多く執筆している。井上の活躍は多方面にわたり、鋭い洞察と類まれな知的探求心は、教学研究において常に新たな地平を切り開いてきたが、教義翻訳に関する指摘、特に原典翻訳についての多くの論点は、現在もなお全く色褪せておらず、傾聴に値する。

まずは井上の功績の一つである天理教教義翻訳研究会について紹介したい。

昭和43(1968)年11月9日、教義翻訳研究会発足に際して井上代表は次のように述べている。

教義翻訳に関しては、過去先人達の努力の結果、十数か国語の翻訳が質量の差こそあれなされて来た。外国人による本教の研究も最近とみにその数を増してきたようである。しかしながら、教内外の出版物を問わず、正直に云って教語に関する乱訳の横行は、現在のところ遺憾ながら認めないわけにはいかないであろう。ここで先ず問題となるのは訳語の統一という作業である。訳者によって教語の訳出が異なるということは、本教の理解に致命的な誤解を与える場合がある。これはただ単に同一言語内の問題だけではない。各分科会の翻訳研究の連携を密にし、諸言語間に於ける訳語統一ということをも含めて考慮しなければならないのは勿論である。教語の日本語による権威ある正しい定義、不翻訳教語の設定等、翻訳理論プロパーに於ける

諸問題も山積している。これらはみな翻訳以前に解決されねばならない問題である。(井上, 1968:6)

戦前、天理外国語学校内に「訳語会」が結成され、それ以後、教授陣が中心となって教義翻訳が続けられていたが、諸言語間の訳語統一は課題の一つであり、それが教義翻訳研究会にも受け継がれた。機関誌『翻訳』での各語分科会報告を見ても、訳語統一がいかに喫緊の課題であったかが理解できる。井上代表はその諸言語間の訳語統一を先導した。

また井上は自身の論文「原典翻訳論考」で、原典の翻訳が教理上許されるのかという原典翻訳の許可性を根本的に問い、天理教原典翻訳の論理的基盤構築を試みた。その許可性に関して、まず「おふでさき」第1号1から8を引用し、「全能なる親神の言語制限の超越性」や「教えの言語化の必然性」、さらには「神言伝達における翻訳の必要性」を導き出し、「必要であるが故に許されるべきであるという実際の許可性」について論じた(井上, 1967:33-34)。

さらに明治33年11月5日の「おさしづ」の中で、「文字抜き差し、上が下に、下が上に、言葉の理に変わり無ければ幾重の理もあろう。一文字でも理が変りたら。堅く〜言うて置く。とても〜理を変わりては道に錆を拵えるも同じ事。(中略)すつきりと人間心で、こらどうそらどう、理を抜いたら、これは半文字もいかに。」を引用し、「人間の知識や論理で自分の都合のよいうに親神の言葉の意味を変えてしまうということは半文字たりとも許せないという神言の絶対性と、言葉の意味に変わらないのであれば、幾重の表現方法もあるという適応性」に着目し、許可性の論証を試みた(井上, 1967:34-36)。

外国語に翻訳する場合、文字の増減や語順の変化は必然的に起こりうる。それが否定されるとなれば、そもそも翻訳は許されなくなってしまふ。その許可性を確保する上で上述の指摘は重要である。また「幾重の理」という抽象的表現から、翻訳における語義の表現には、多様な表現形態も考えられるという解釈が可能であるとも指摘した(井上, 1967:37)。「おふでさき」や「おさしづ」に翻訳そのものの許可性を求めた論述は、おそらく教義翻訳史上初であろう。

井上は原典翻訳に携わる者の態度に関して、「翻訳というものは、その理論上の不可能性の中に、新しい可能性、次元の高い意味での教育的、文学的、啓蒙的可能性を見つける行為であると言えよう。従って、絶対的完成を目指してそれが実現されないよりも、翻訳者の実力に応じた処の現実的相対性ののっとり、原文の選択再現を求める態度が望まれるものであると考えられるのである。」(井上, 1967:50)と言及している。

僭越ながら筆者も原典翻訳に携わる者の一人である。過去には、浅学菲才が故に翻訳が遅々として進まず、絶望感と共に教祖殿でお詫びする日もあった。そのような時、上述の論文が一つの希望のように感じられた。井上の論文を読み直し、その慧眼に敬服しつつ、折れた心を再び翻訳に向かわせる事ができた。

原典翻訳には、原典の言葉が自身の内面に共鳴する境地を垣間見る瞬間がある。おそらくそれは「読み手」と「書き手」双方を担う翻訳者が感じる神人和楽の世界であり、先学の足跡を辿ることで、その世界への扉に辿り着けるように感じる。

[引用文献]

井上昭夫「原典翻訳論考」『天理教学研究』16、天理教道友社、1967年。  
井上昭夫「天理教教義翻訳研究会発足に際して」『翻訳』(創刊号)天理教教義翻訳研究会、1968年。

# カイロの日常—天理参考館の現代エジプト展—

おやさと研究所講師  
澤井 真 Makoto Sawai

## エジプトの大衆娯楽

2022年春に天理参考館で開催された現代エジプト展の娯楽コーナーに展示された田中四郎の収集品と同じ品々が、今でもカイロの街角で見かける。

カイロの街を歩いていると、必ず出くわすのがカフェや喫茶店である。店舗を構えて営業している店もあれば、路上で椅子や机を並べて営業しているものまでさまざまである。路上カフェを利用する—正確には利用できる—のは男性であり、男性の社交場である。もちろん、若い女性や家族連れが利用する喫茶店も多く存在する。

路上カフェにかかせないものに、コーヒーや紅茶などの飲み物や水タバコとともに、ボード・ゲーム(ゲーム盤)がある。「タウラー」(バックギャモン)(図1)は世界的にも有名なゲームであるが、その歴史は古く、世界最古のゲームの一つと考えられている。Windows製のパソコンには幾つかのゲームが標準搭載されていたが、その一つがバックギャモンでもあった。

筆者もエジプトへ留学して初めて、バックギャモンを目にした。

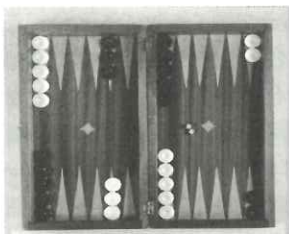


図1 タウラー  
(天理参考館蔵)

このゲームは二人で行うが、カイロの街中では、バックギャモンに夢中になる「エジプト紳士」を取り囲むギャラリーの姿も日常の光景である。

バックギャモンの次に人気があるのがドミノであろう。日本で「ドミノ」と聞いて人々がイメージするのは、恐らく「ドミノ倒し」か「ドミノピザ」であろう。

テレビ番組では、芸能人たちがドミノ倒しに挑戦したり、軽快な音楽とともにピザ屋のテレビCMがしばしば放映されたりする。「ドミノ倒し」と呼ぶ理由は、ドミノで用いる牌を用いることに由来しており、ドミノ・ピザのロゴにもドミノ牌が用いられている<sup>(1)</sup>。

近年、日本のみならず世界的に見ても、テレビゲーム産業の興隆が目覚ましい。子どもや若者に人気のテレビゲームが多く登場しており、エジプトでも多くの若者がテレビゲームに興じている。しかし、エジプトの庶民を見ていると、世代間で違いはあるものの、娯楽を楽しむ姿は大人も子どももそれほど変わらないように思われる。

## 水タバコの楽しみ

筆者が水タバコ(図2)を初めて知ったのは、高校の世界史の教科書であった。エジプト建国の父として知られているムハンマド・アリー(1769~1849)がイギリス代表との会談に、水タバコを燻らせながら応じているという絵画である。第2次エジプト・トルコ戦争は、当初、エジプトがオスマン帝国を圧倒していた。それに



図2 水タバコ  
(天理参考館蔵)

もかかわらず、イギリスの介入によって、ムハンマド・アリー率いるエジプトは降伏を余儀なくされた。そのため、絵画は降伏交渉を行っている光景を描写したものである。ただし、状況的に、ムハンマド・アリーが水タバコを楽しむほどの精神的余裕があったとは思えない。

喫茶店で、男性たちのなかには、水タバコを吸いながらボード・ゲームに興じてい

る者も多くいる。水タバコ(シーシャ)の仕組みは以下の通りである。まず、タバコの葉を詰めてアルミホイルで蓋をし、アルミホイルに小さな空気孔をいくつか開けたうえで台にセットする。そして、真っ赤に焼けた炭を、アルミホイルの上に置き、パイプから息を吸ったり吐いたりする。こうすることで、アルミホイルに開けた空気孔から空気が送られてタバコの葉が燻される。燻された煙は水を一度くぐった後にパイプから出てくるため、冷たく感じられる。火が弱まってくると煙が出にくくなるため、炭を交換してもらう。一度セットすると、タバコの葉から数時間は煙が出てくるため、長時間タバコを楽しむことができる。

タバコの葉は、リンゴやブドウなどのフルーツをはじめとするフレーバーを選択できるため、自分の好きな香りを選ぶことができる。もちろん、副流煙ではあるが、喫茶店の横を通ると甘い香りがする。

また真偽は不明だが、友人は紙タバコよりも水タバコのほうが健康的だと言っていた。その友人は、「タバコの煙は水をくぐったときにタールが落ちるから、紙タバコよりも健康なんだ」と筆者に力説しながら、2時間近く水タバコを吸い続けていた。

## アラブ・コーヒー

また欠かせないのが、コーヒーや紅茶である。「コーヒー」という呼称の起源はアラビア語の「カフワ」(qahwa)である。コーヒーの起源は諸説あるが、その一つにエチオピアがある。エチオピアはイスラームとの関わりが非常に深い地でもある。イスラームが創始された直後、一部のムスリムが迫害を逃れるために移住した地であった。

エジプト訛りでは「カ」の発音が「ア」になってしまうため、コーヒーのことを「アフワ」と呼んでいる。私たちが飲むコーヒーは、多くの場合ドリップ式である。つまり、フィルターで濾したコーヒーである。しかし、アラブ・コーヒーやトルコ・コーヒーと呼ばれるコーヒーは、濾すのではなく煮出して飲む。ドリップ式のコーヒーの粉と異なって、アラブ式のコーヒーの粉は焙煎後に粉末状にする。粉末状にした粉は、水やカルダモンやシナモンなどのスパイスとともにコーヒーポット(図3)に入れる。もし甘さが必要であれば、あらかじめ砂糖を入れたうえで火にかける。吹きこぼれないようにじっくり火にかけたうえで、粉ごとカップに注ぐのである。コーヒーの粉を煮出すため、味やカフェイン量も非常に多い。しかしながら、スパイスが入っているため、全体として爽やかな味わいである。



図3 コーヒーポット  
(天理参考館蔵)

数か月前に、一度飲んでみたいと言う学生たちにアラブ・コーヒーをふるまってみた。初めて飲んだ味で、コーヒーとは思えないと言っていたが、思った以上に美味しかったようだ。ちびりちびり飲みながら楽しくおしゃべりをする光景は、日本もエジプトも変わらない。

## [註]

(1) 日本ドミノ協会はドミノ・ゲームの団体ではなく、ドミノ倒しの団体である。

## 鳥の言葉がわかる？

天理大学国際学部教授  
中 純子 Junko Naka

動物や植物が人の音楽に反応するということを述べてきたが、逆があっても不思議ではない。人には動物の言葉がわかるのだろうか。動物のなかでも、美しい歌声を響かせる鳥類について考えてみたい。日本人は鳥の声をどう聴いているか。例えばカラスは「かあかあ」、トンビは「ぴーひよろぴーひよろ」、ハトは「ほーほー」、スズメは「ぴーちくぱーちく」、ウグイスは「ほーほけきよ」と鳴く。古代中国はどうかというと、鳥は「啞啞（現代語では「やーやー」）、鶯は「啁啁（じーじー）」、水鳥は「嘎嘎（がーがー）」、鶏は「喔喔（うおーうおー）」と、わたしが目にする唐代以前の文献にはそのような文字で音が記されている。他にも多くの鳴き方があるだろうが、どうもその音の羅列から鳴き声の意味を把握するのは難しいように思われる。

人は、時に鳥の鳴き声に自分の想いを投影する。白居易は「慈烏夜啼」詩（『白居易集箋校』巻一）で「慈烏は其の母を失い、啞啞と哀音を吐く、昼夜 飛び去らず、年を経て 故林を守る」と、母を失った悲しみをその声に聴き取っている。それは丁度日本の童謡の「カラス何故鳴くの、カラスは山に、可愛い七つの子があるからよ」と、一方は親を想い、他方は子を想う違いはあるにせよ、類似している。しかし、これは所詮想像の世界であり、カラスの思いは本当にはわからないことであろう。

鳥は人のように意味のある言葉を発しているのだろうか。現代では、小鳥の声を「さえずり（歌）」と「地鳴き（コール）」に分けて、さえずりには一音一音に意味はないが、地鳴きはそれぞれが特定の意味をもった単語のようなものであり、小鳥も捕食者がきたときには「逃げろ」と「アラームコール」を発したり、親鳥に「餌くれコール」を発するなど、小鳥語の研究も進められている（岡ノ谷一夫「動物のおしゃべり解説学 地鳴きの中に聞こえる小鳥語の進化」『日経サイエンス』32巻（5）2002年）。さらに、中学校の国語の教科書に取り上げられた『言葉』をもつ鳥、シジュウカラの筆者である鈴木俊貴博士（京都大学白眉センター）は、シジュウカラの「ジャージャー」の鳴き声は「蛇」を指し、他の単語と組み合わせて仲間に危険を知らせるなど、鳥も言葉を操ることを突き止められている。

実は中国古代にも、鳥の言葉がわかる人間がいたことが記されている。『周礼』秋官の「夷隸」は鳥と話すことができる（「貉隸」は獣と話すことができる）とある。「夷隸」とは異民族出身者であり、野蛮な夷狄だからこそ鳥獣と通交できると考えられていたらしい。面白いことには、孔子の弟子のなかにも、それができる者がいて、その特殊能力によってか、孔子が自分の娘を嫁にやってもよいと考えるほどだったという。それについて、非常に詳細な考証をされて思想史的な意義にまで踏み込んで明らかにされた戸川芳郎先生の「公冶長の解鳥語について」（東京大学東洋文化研究所『東洋文化』57 1976年）がある。ここでは、そこに示された皇侃（488～545）の『論語集解義疏』にみえる公冶長のエピソードを要約して紹介させていただきたい。

孔子の弟子の公冶長は、獄舎に入れられていた。その理由は、鳥の言葉がわかったからであった。公冶長は、鳥たちが「清溪に往き、死人の肉を食まん」と言っているのを耳にした。そのあと自分の息子の行方がわからなくなったと

嘆く女性が現れ、公冶長は鳥たちの言葉を思い出して、女性に清溪に見に行くようにと言った。女性が行ってみると、はたして自分の息子の遺骸があった。女性は息子を殺したのは公冶長だと思った。なぜなら、そうでなければそこに遺骸があることを知るよしもなかったからである。獄舎に繋がれた公冶長は、自分は無実であり、鳥の言葉を聞いてそれを女性に告げただけだと述べた。しかし、それを信じる者はおらず、鳥の言葉を理解することが証明されなければ死罪ということであった。獄舎に繋がれて60日たったとき、雀が獄の柵上で騒がしく鳴くのを見て、公冶長はニッコリと笑った。なぜなら、雀たちが「白蓮水のほとりで穀物をつんだ車がひっくり返って立ち往生している。みんなで行ってそれを啄ばもう」と言っていたからである。村長が人をやって確かめさせたところ、その通りであった。でも誰かが公冶長に告げたのであろうと、許してもらえなかった。しばらくたって、公冶長が猪や燕の言葉をも理解することがわかると、やっと許された。

公冶長が鳥の言葉を理解したという話は、実は孔子の時代から伝えられていたわけではない。戸川論文によれば、「おそろく魏晉の交からのち、ここに見られるような、公冶長に関する説話が語られるようになった」のである。「人類と異類の鳥獣とのあいだに六情において通交しうる、とする考えがその根底にあり、すぐれた知力を保つ人士にはそれが可能であったとする」と論じられている。人間が異類の言葉を理解できるという説話がこのころから現れ、当時の人々はその能力を高く評価したのである。現代で考えればドリトル先生のような夢物語なのであろう。しかしそれは信じられていたようである。

獣の言うことを理解する人間についても、古代に記録がある。『春秋左氏伝』僖公二十九年（B.C.631）の条に「介氏の国の葛盧という者が牛が鳴くのを見て『この牛は小牛を三頭産んだが、みな犠牲に用いられた。鳴き声でそう言っています』というので、調べるとその通りであった（介葛盧聞牛鳴、曰是生三犧、皆用之矣。其音云、問之而信）」とみえる。牛の鳴き声が悲し気であったので、そのように想像したとも考えられそうである。しかし魏晉の交の人である杜預（222～284）は、これに「異類の情に通交するものも或る」と注釈をつけている。どうも当時はそれができることが広く信じられていたようだ。鳥獣の声を基にした『鳥情雑占禽獸語』『鳥情占』『鳥情逆占』などの占いの書が『隋書』経籍志に著録されている。鳥や獣と話すというより、その声から感じ取れることがあったというのだろうか。

しかしながら、前回は述べた草が踊ることを合理的に理解しようとした宋代の人は、こうした異類との通交についても正常な感覚では信じられない、と否定的であった。筆者は、戸川先生が授業で宋代以降の人間の感覚はなんとか理解できると言っておられたことを思い出す。それは空想や感覚より常識や理論が先行する現代人に繋がる人間のありかたなのかもしれない。それでも、動物や虫や草が人間の音楽を感知したことを考えると、人が異類と通交できると信じた古代の人の感覚の方に共感したくなるとういうものである。

## 「世界平和の祈りの会」の閉会式で講話

大ローマ布教所長  
山口 英雄 Hideo Yamaguchi

## 「世界平和の祈りの会」の閉会式で講話

法王フランチェスコは、10月23日から25日までローマで開かれた聖エジディオ共同体主催の「世界宗教者による平和の祈りの大会」の閉会式に参加した。法王はコロッセウム内でのキリスト教徒による平和の祈りに参加し、その後コロッセウム外の「大会」の閉会式に臨んだ。外部には諸宗教の代表者たちが法王を待ち、歓迎の拍手が巻き起こった。

法王は講話の中で、ロシアによるウクライナ侵攻の問題を取り上げ、第3次世界大戦や核戦争の危機を訴えた。戦争を悪とし、停戦を願い、神に平和をもたらしてくれることを希求し、我々人類は一心に平和を祈ろうと、世界の諸宗教の代表者たちに向けて一致団結を呼びかけた。

「戦争は政治と人間性の失敗を意味する。恥ずべき行為であり、悪の力に対する敗北である、20世紀の2度の大战からの教訓が何も生きていないのだ」。多くの宗教の代表者、何人かの枢機卿に混じって、ロシア正教ナンバー2のアントニー氏がいたが、どういう心境だったろうか。「大会」は「平和宣言」で幕を閉じた。

大会を受け入れたローマは、今日も永遠の都であることを示し、人々を歓迎し、包容し協力しようという雰囲気であふれた。この寛容さは、来るべき2025年の「聖年」に引き継がれることだろう。

## カザフスタンでのキリスト教各派の集会で

ウクライナ訪問の話がなかなか実現しない中、9月13日から開かれたカザフスタンでのキリスト教各派の代表者の集会上、ローマ法王も出席した。法王は15日にはローマに戻ってきたが、この集いには余り実りがなかったようだ。ローマへの帰りの飛行機の中での、記者団との恒例の質疑応答にもそれがはっきりと現れている。質疑応答で最も時間を割いたのがウクライナ侵攻の問題、次にイタリアの政界について、3番目が中国との関係である。ウクライナ侵攻については、法王は戦争を始めた国と対話するのは難しいと述べるにとどまった。「国連はこの70年間、平和について話し合ってきた。しかし、今世界にはいくつもの戦争がある。1945年、第2次世界大戦が終わった時、私の母は嬉しくて泣いた。今、平和のために泣ける人は、どれぐらいいるだろうか。戦争を開始した国の責任者と対話するのは難しいことだ。今のロシアを見て、それはすぐにわかる。しかし、戦争停止のための努力は必要だ。」

イタリアの政情については、法王は政治に関係しないと言っている。「今まで政治家の中では、前大統領ナポリターノと現大統領マッタレッタを知っているのみだ。両者とも優秀な政治家だ。」

中国との関係についてはこう述べた。「中国を理解するには1世紀はかかると思う。しかし、我々は1世紀も生きられない。我々是对話の道を選んだが、中国人の考え方を理解するのは難しい。しかし、対話を、少しずつでも前進させていく必要がある。彼らにも敬意を払うべきだ。」

## 中国との外交状況

ヴァチカンと中国との暫定的外交処置は、4年前の条約が2022年10月に切れるために、その更新に向けた交渉が続いていたが、さらに現状のまま、2024年10月22日まで2年間継続されると決まった。一番大きな課題は、法王の司教任命権についてである。世界の司教任命権はローマ法王が持っているが、中国だけはそれが通らず、中国政府の決めることになっている。現在の中国では、カソリックはいまだ公認されていないが、教区教会が98カ所、一般教会が4,202カ所。他の活動地が2,238カ所ある。司教は66人である。これは、ヴァチカンによって明らかにされている数の3分の1である。条約はこの4年間、何も修正されていない。2022年5月香港で逮捕され、今でも裁判が継続中の枢機卿ジョセフ・ゼンの問題もある。「中国との対話は難しいが、忍耐を失ってはならない。時間をかけて対話を進めなければならない。」と法王は述べた。

## 世界の120カ国の若者との出会い

「地球は今燃えている。いろいろな面で地球を変えるのは今だ」。法王は、世界中から集まった数千人の若者たちに、「互いに落ち着いて話し合うよう努めなさい。」と話しかけた。彼らは世界の120カ国から集まった。これは聖フランチェスコの経済観に基づいた3回目の集会である。この集会は、4年前、現法王が発足させた。聖フランチェスコの「世界経済の変貌」に沿って資本主義が展開することを法王は期待する。そのためには「進歩のモデル」を検証し、またこれ以上の命が犠牲にならないよう努力しなければならない。聖フランチェスコの理念に啓発された経済活動とは「貧しい人々」を中心に置くことだ。だから、「貧者を見捨ててはいけぬ。今の我々の資本主義は貧者を助けてはいるが、貧者を尊敬してはいない。」と法王は述べた。

## 地震の地・アクイラへ

去る2009年4月6日に起きた地震により、震源地アクイラでは300人が亡くなっている。法王は8月27日、ローマから東へ100kmの町アクイラを訪れた。復興活動に従事する人々を励まし、勇気のメッセージを与えるためである。法王は祈りの集会上、最前列に座った犠牲者の親族に対して、アブルツォ地方の方言で見舞いの言葉を述べ、イタリア語に切り替えて、さらに勇気を持って前進しようと訴えた。そのあとヘルメットを被り、車椅子でドウオーモの中に入り、復元中の教会内を見て回り、「地震で傷ついたところを早く癒してやってほしい。」と語った。法王は「聖なる扉」を通る時、車椅子から立ち上がったが、その扉を通過するのが苦しそうだった。膝の痛みがさらにひどくなっているようだ。この「聖なる扉」は各地の教会の「聖なる扉」より古い形式で、1294年に法王チェレスティーノ5世によって定められた。このことは「神曲」を書いたダンテの叙述の中にも見られ、法王はそれを擁護している。チェレスティーノ5世はアクイラに埋葬されている。「かの法王は聖なる貧の教会を尊び、権力の横暴から自由の教会を守った。私は貧しい教会と貧しい人々のための教会を切望している。我々は息子たちのために、孫たちのために、未来のために働いているのだ」と法王は述べた。

ニューヨークの治安とアメリカ中間選挙

10月25日、ニューヨーク州の最高裁判所は新型コロナウイルスのワクチン接種義務に従わずに解雇されたニューヨーク市職員を復職させ、過去に遡り給与を支払うように命じた。裁判所は市の接種義務は恣意的で気まぐれなもので、違憲と認めた。ニューヨーク市は未接種を理由にこれまで約1,400人を解雇しているようで、今回の判決はワクチン接種を強く推進してきた現政権にとって逆風であり、11月8日に行われるアメリカ中間選挙の結果にも影響する可能性があると言われている。

ニューヨーク州は長い間民主党が圧倒的に優勢な州であり、民主党員は共和党員の約2倍となっており、過去20年間、共和党の知事が選出されていない。今回の中間選挙では民主党の現職ホウクル知事と共和党のゼルディン氏との対決となっている。

今年は40年ぶりの高いインフレ率に悩まされているが、ニューヨーク州では経済問題より、治安問題が最も重要な課題となっているようだ。ニューヨーク州では過去1、2年間に刑事司法改革が行われ、軽犯罪を犯しても保釈金を納めることなく釈放されるという法律 (Cashless Bail) が導入された。これに似た法案はカルフォルニア州でも成立しており、例えば、窃盗したものが合わせて950ドル以下であれば軽罪となり提訴されにくくなる。そのために犯罪が増加し治安を悪化させていると言われている。

それに加えて、ニューヨーク州は、青少年の犯罪年齢を18歳まで引き上げたり、警察の権限を制限する法令を定めた。そのために、犯罪の温床となり、凶悪事件が頻発している。特にニューヨーク市の地下鉄はとても危険な場所となり、人をホームから突き落としたり、強盗したり、発砲事件が多発している。ニューヨーク市長は10月に非常事態宣言を発した。不法入国した移民が急増したこともあり、収容所に入っている人は過去最高水準となっているからだそうだ。

ゼルディン氏は民主党が主導してきたこれらの法律を即廃止することを公約に掲げ、ニューヨークの人々の共感を得つつある。現職のホウクル知事は、妊娠中絶の権利を保証することに焦点を当てている。ニューヨーク州の民主党の地盤は堅いが、都市犯罪問題だけで今年の中選挙において、ニューヨークが共和党の州になる可能性が出てきている。

以前ジュリアーノニューヨーク市長が治安回復に尽力して警察官を増員し、安全な街づくりを実現したことをニューヨークの市民は忘れてはおらず、再度治安が回復することを切望している。

現在アメリカの議会は上院も下院も民主党が支配しているが、今回の中間選挙では、両院とも共和党が奪還するのではないかとの予想が出てきている。この『グローバル天理』が発行される頃には結果が出ているが、今回の中間選挙は、アメリカの今後の方向性を決める大切な選挙になると思われる。

天理こどもクラブの活動

ニューヨーク天理文化協会の活動の一つに天理こどもクラブがある。これは、正規の日本語クラス以外の課外活動のようなもので、月1回ぐらいの頻度で開催される。パンデミック前は鼓笛の活動を中心に進めてきたが、現在は日本の文化体験をテーマに行われている。文化協会に通う子供たちが教室外で他のクラスの生徒と触れ合う機会を設け、活動を通して感謝・憤り・たすけ合いの心が育つように企画している。

前は「秋祭り」体験をテーマに子供たちでお神輿を作り担いだり、ハッピーを着たり、金魚すくいなどして楽しんだ。23名の子供たちが参加した。この行事の手伝いに現地の学生会や青年会、女子青年の人たちも加わり共々に楽しいひと時を過ごした。



写真：天理こどもクラブ「秋まつり」

「ニューヨークの厳しい環境の中で育つ子供たちにとって、このような機会を通して日本文化に触れ、優しい人々と触れ合う事は、それだけで大変幸せな貴重な体験です」「先生方が一生懸命用意してくださったのだなぁと思い温かい気持ちになりました」などの嬉しい感想をいただいている。

アメリカ伝道庁は2024年に創立90周年を迎えるが、活動目標の一つに「コミュニティーに最も必要とされるひのきしん活動を見つけ共に行動に移す」とある。こどもクラブの活動が地域コミュニティーに貢献できるように継続し、ニューヨークで育つ子供たちの心にほんのりとした温かい思い出が残ればと願っている。

リーマンカレッジとの交換留学開始

パンデミックの影響で延期になっていたニューヨーク市立大学リーマンカレッジとの交換留学がようやく実現し、8月から1年間の予定で2名の天理大学生が学んでいる。一般の学部の授業の他に日本語クラスのティーチングアシスタントも行っている。2人は、それぞれ現地の布教所に宿泊しながら通っている。通学に時間がかかるのが課題だが、充実した毎日を過ごしているようだ。第1回目の留学が成功し、引き続き多くの天理大学生がニューヨークを訪れ学んでいけるように願っている。

## 「碍」の字表記問題再考 (22) 仏教にみる障害者像

厩戸王が撰述した『維摩経義疏』の基になったのは、4世紀から5世紀初頭の中国六朝時代の天才の学僧の鳩摩羅什が翻訳した『維摩詰所説経』である。この經典には自己の救いのみを目指す小乗思想ではなく、多くの人々を涅槃の境地に導く「大乘仏教」の教えが説かれている。

大乘仏教とは釈尊の死後に興った仏教の二大教派の一つであり、出家者だけが救われるのではなく、在家者であっても仏教の教えを実践するならば、すべての人は救われることを説いた教えである。

この『維摩詰所説経』(以後『維摩経義疏』)は、主人公である在家の維摩詰が、出家者である釈尊の弟子たちとの問答を展開し、修行や思想を論難し、釈尊の教えの真理を明らかにして導くという戯曲的構成となっている。内容は「佛國品第一」「方便品第二」「弟子品第三」「菩薩品第四」「問疾品第五」「不思議品第六」「觀衆生品第七」「佛道品第八」「不二法門品第九」「香積佛品第十」「菩薩行品第十一」「見阿閼佛品第十二」「法供養品第十三」「囑累品第十四」の章立になっている。

### 障害の表記

『維摩経義疏』における障害に関する表記については、まず「佛國品第一」に「障礙」の表記を見ることができる。

聲聞衆内。須科二文。初標其名。次唱其數。所言大者。智度論云。一切諸衆最勝故。

天王等大人恭敬故。大障礙斷故。

須因中修慧業而得斷一切煩惱一切障礙一切不善法起一切善業者唯善能遣。

聾盲瘡癩是形難也此八難以人天四輪爲除也。

(下線は筆者が強調)

障礙(以後障碍)の「碍」の字表記については本連載においてその意義を言及してきた。1981年以降、障害当事者団体より第2次世界大戦以前は「障害者」ではなく「障碍者」であった。「害」は悪いイメージを与えるものであり、なおかつ、人に対して用いるものではない。戦前の表記に変更すべきであり、そのためには常用漢字表に「碍」を追加するようという強い要望が出されていた。それに対する回答が2021年に政府より、「障碍」の表記は仏教語として存在し、負の意味を持つことから「障碍者」の表記にすることは政府としてはあり得ない旨の発表がなされたのである。その「障碍」の表記をここに確認する。

この「佛國品第一」に書かれている内容は、釈尊が毘耶離という所で多くの男性出家者とともに過ごし、その出家者たちが解脱するさまについて書かれた章である。その文章の中で「大障礙斷故」と記されている。この障碍は仏教用語で「しょうげ」と読み、意味は「障害、さまたげ、さとりを得るための障害となるもの。」(『広説佛敎語大辞典』)となっている。ここでの意味は解脱の邪魔となる悪霊を打ち破り、あらゆる障碍を断ち切ることを説いている。

さらにこの章では、卓越した福德と治を積み重ねて32種類の勝れた身体的特徴と80種類の副次的な身体的特徴を備えた身体について語られている。その中で聾盲瘡癩の表記が見られる。聾盲瘡癩は視覚、聴覚の障害により情報収集に困難を強いられている人々を表わす言葉である。

次に「方便品第二」では、次の表記が確認できる。

一生盲聾。此是苦報。二世智辨聰。邪見煩惱。治世智辨聰難。四宿植善根輪。治生盲聾難。若約行治者。持淨戒。治三塗難。樂法施。治聾盲難。修正法。云何日月豈不淨耶而盲者不見。對二日不也世尊是盲者過非日月咎舍利弗衆生罪故不見如來佛國嚴淨非如來咎。三隱穢現淨。令其證見。則悟入4云次第也。問。日日常淨。盲者不見。是盲人過。地難世智辨聰是心難佛前後是時難盲者不見。

この章は、毘耶離に住む維摩詰について縷々書かれている。在家の維摩詰は釈尊を崇敬し、善果報を積み重ね、障碍を打ち破る法に精通し、釈尊の「衆生」の意向と行いを熟知している人物であることが記されている。ここで語られている教説は、人間の身体は、泡沫の塊のようなものであると述べている。さらに、この身体は無常であり、堅固なものではなく、頼りにならないものである。老衰していき、貧弱なもので苦悩に満ち、常に変化するものであり、多くの病の入れ物なのである。煩惱の渴愛から生じる陽炎のようなものであり、永く存続することはないと説いている。その題材に盲、聾などの障害の表記が用いられている。

次の「菩薩品第四」でも盲の表記が何カ所も見られる。

是時大迦葉聞説菩薩不可思議解脫法門歎未曾有謂舍利弗譬如有人於盲者前現衆色像非彼所見一切聲聞聞是不可思議解脫法門不能解了爲若此也智者聞是其誰不發阿耨多羅三藐三菩提心我等何爲永一斷其根於此大乘已如敗種。

唯應度者。乃能見之。身子既如盲對像。何能見大座入於小室。答。大明衆生。凡有三種。一者不見大入小。亦不達其所由。此凡夫不得見聞之流也。二者雖見大入小。而不能解之。身子謂見而冥然不解。故譬之爲盲。

この章では、「覺り」について述べられ、その覺りの境地とは「あらゆる心の囚われを断って、無執着に入ることである。」と説いている。その中で盲の言葉を何度も用いて説明している。

障害の表記については、上記に示した以外に「弟子品第三」で盲が3カ所、聾が1カ所、「菩薩品第四」には、盲が3カ所、「問疾品第五」では、盲が1カ所確認できる。この『維摩経義疏』での障害に関する表記は、『勝鬘経義疏』と比較してかなりの頻度で登場し、教えを展開する題材に用いられている。

『維摩経義疏』で説かれることは、種がまかれることを「因」といい、現れ出るのを「果」という「因果応報」的な表現が随所に見られる。その教えのたとえとして、障害のある人の存在を示し、他者への戒めとして用いている。その内容は差別的な意味が強く、解説することは差し控え、省略したい。

### [引用・参考文献]

望月信亨・高楠順次郎『聖徳太子三経義疏上巻』世界聖典全集刊行會、1943年。

聖徳太子御撰四天王寺勸学院編『維摩経義疏乾巻』四天王寺、1976年。

聖徳太子御撰四天王寺勸学院編『維摩経義疏坤巻』四天王寺、1978年。

中村元『現代語訳大乘仏典3「維摩経」「勝鬘経」』東京書籍、2003年。

植木雅俊『維摩経・サンスクリット版全訳現代語訳』角川ソフィア文庫、2019年。



## 第3講：139「フラフを立てて」

今回の公開講座では、次の逸話をもとに「おぢば帰り」の意義について考えてみました。

## 一三九 フラフを立てて

明治十七年一月二十一日（陰暦 前年十二月二十四日）、諸井國三郎は、第三回目のおぢば帰りを志し、同行十名と共に出発し、二十二日に豊橋へ着いた。船の出るのが夕方であったので、町中を歩いていると、一軒の提灯屋が目についた。そこで、思い付いて、大幅の天竺木綿を四尺程買い求め、提灯屋に頼んで旗を作らせた。

その旗は、白地の中央に日の丸を描き、その中に、天輪王講社、と大きく墨書し、その左下に小さく遠江真明組と書いたものであった。一行は、この旗を先頭に立てて、伊勢湾を渡り、泊まりを重ねて、二十六日、丹波市の扇屋庄兵衛方に一泊した。

翌二十七日朝、六台の人力車を連らね、その先頭の一人乗りにはこの旗を立てて諸井が、つづく五台は、いずれも二人乗りで二人ずつ乗っていた。

お屋敷の表門通りへ来ると、一人の巡查が、見張りに立っていて、いろいろと訊問したが、返答が明瞭であったため、住所姓名を控えられただけです。

お屋敷へ到着してみると、教祖が、数日前から、

「ああ、だるいだるい。遠方から子供が来るで。ああ、見える、見える。フラフを立てて来るで。」

と、仰せになっていたので、お側の人々は、何んの事かと思っていたが、この旗を見るに及んで、成る程、教祖には、ごらんになる前から、この旗が見えていたのであるなあ、と感じ入った、という。

\*

この逸話に登場する「諸井國三郎」は、山名大教会の初代会長であり、明治20年代に急成長していく天理教の草創期を支えた一人です。

16歳のときに改名して旗本に士官した國三郎は、幕府が解体したあと明治6年（1873）に33歳で郷里へ戻ります。明治の新しい国づくりに寄与するために、國三郎は郷里である遠州の地で農業を基礎とした新しい殖産を目指しました。このころ、吉本八十次という若者との出会いをきっかけに信仰をはじめた國三郎は、明治16年（1883）にはじめておぢばへ帰ります。教祖にお会いしてさらに信心を深め、教えの取次ぎを受けた國三郎は、帰郷して同信の人々と講社を組織します。國三郎は、同年のうちに再びおぢばへ帰り、さらに翌年早々に3回目のおぢば帰りに出立しました。

今回の逸話は、このときの様子を伝えたものです。山名大教会の発祥の地（現、遠本分教会）は、旧東海道の隣接した場所にあります。また、所在地の袋井宿は、いわゆる東海道五十三次の中継地点に位置する主要な宿場の一つです。東海道から船や徒歩で伊勢神宮へ参詣し、高野山、奈良、京都、大阪などを巡る「伊勢参宮ルート」は、明治以降も東海道線が全線開通する明治20年代まで盛んに利用されます。明治17年のおぢば帰りのルートもまた、伊勢参宮のあと青山峠から名張、三輪をまわって奈良や大阪方面へ向かう典型的な旅程の一つでした。

また、中山家の最寄りの宿場となる丹波市は、古くから奈良・

京都・大阪と伊勢・吉野方面を結ぶ交通の要所でした。とくに近世には、奈良盆地を横断する「上街道」の要所として賑わいます。こうした代表的な伊勢参宮ルートに沿っていたことが、少なくとも初期の山名の信仰にとっては重要だったのではないのでしょうか。最初の講社も伊勢参詣との関連で結ばれています。こうした文化や制度を背景にして、江戸時代の社会に定着していた伊勢参りのように、人々が集団で「おぢば帰り」をするようになったのは、むしろ自然の成り行きだったのかも知れません。

また、山名大教会の立地を考えると、ここから東・西・南・北の遠隔地に布教線が拡大していったことも頷けます。教祖には「フラフ」だけではなく、こうした将来への展望も見えていたのでしょうか。

\*

『復元』（第4号）所収の「天輪王講社信心道書抜」（明治16年）などを見ると、当時の山名関係の方々の教理解の深さがよく分かります。数日間の旅（このときは、7日目にお屋敷に到着）をともにするおぢば帰りの道中では、それぞれ身の上話や世間話に花を咲かせるばかりでなく、教祖の教えについても互いに語り合い、教理の理解を深める場面があったはずで

北海道出身の筆者は、かつて教会長であった父とともに、何度もフェリーで「おぢば帰り」をしました。小樽を出港して敦賀や舞鶴に到着するフェリーは、30時間以上航行を続けます。丸一日以上船旅をともにし、座敷席に持参した弁当を広げて語り合っていると、いつも笑い声は絶えないのですが、ときには真剣な問題についても話しが及びます。旅の道中では、日常の立場や社会的地位を度外視して、それぞれが一人の人間として互いに向い合い、語り合うことができるのです。

かつて、文化人類学者のヴィクター・ターナーは、巡礼や通過儀礼のような宗教的行為の分析に「コムニタス」という概念を用いました。日常性の構造であるコミュニティに對置される「反構造」としてのコムニタスの経験は、日常生活に疲弊した人々に社会における役割とは異なる「自分」と向き合う機会を与えてくれます。そして、コムニタスの空間で社会／構造から開放された人々は、再び社会／構造に戻って自らの役割を果たす意欲を取り戻すのです。

初期の頃から「おぢば帰り」の団参には、こうした効果や機能があったのではないのでしょうか。「フラフ」を掲げて、颯爽とおぢばへ向かう一行の逸話には、団参の喜びと人々の高揚感を感じます。とくに「人類のふるさと」である「ぢば」へ帰り、「月日のやしろ」である教祖にお目通りした人々は、日常に戻ったあとも新たな気持ちで今日を生きる力に満たされたのではないのでしょうか。

\*

遠隔地から「ぢば」へ寄せる想いは、この逸話から140年近い年限が過ぎた今日においても、多くの人々に共有されています。おぢば帰りという非日常の空間において得られる経験は、現在においても未来においても、天理教を信仰する人々を支える大きな力であり続けるはずで

## 第4講：108 「登る道は幾筋も」

## 1. 登場人物

この逸話は明治15年（1882）頃の話であり、登場人物は今川清次郎である。今川は弘化元年（1844）生まれで、明治15年には38歳で働き盛りの頃である。仕事は大阪船場で樽の製造をしていた。屋号は「たるセ」である。入信のきっかけとなったのは長年の胃病である。今川自身は熱心な「法華経」の信者であったが、教祖に胃病を救けていただき、それを機にお道一筋となり、「人助け」に生涯尽くした人物である。

## 2. 逸話の勘所

「胃病をご守護いただく」

今川は、「家に僧侶を請じていつも祈祷していたが、人の病気は救かることはあっても、自分の胃病は少しも治らなかった」と逸話に記されている。

長年、胃病に悩む今川はなんとか自分も救けていただきたいと法華経にすがるものの、自分自身の病は治らず、はがゆい思いの日々であった。そんな中、近所の竹屋のお内儀から「結構な神様がありますのや。」と教祖のことを紹介されてお道の話聞かせていただき、三日三夜のお願いで、三十年来の胃病がすっかり治ったのである。鮮やかにご守護いただいた今川はそれ以降、法華経からお道に改宗し、名前も清次郎から「聖次郎」と改めている。

## 「登る道は幾筋も」

教祖より、「富士山は、頂上は一つやけれども、登る道は幾筋もあり、どの道通っても同じやで」と聞かされ、いたく感激した。法華経を信心する今川がお道に改宗した動機は、悩んでいた胃病に不思議な、鮮やかなご守護をいただいたことに尽きるが「登る道筋は幾筋もあり、どの道通っても同じやで」という教祖のお言葉が今川の心に響き、法華経からお道の信仰へと改宗させる内的パワーを生みだし、新たな信心の道を歩み出したのである。

加えて、明治16年には今川の9歳になる長女のヤスが花疥癬となり、その時にも教祖よりお助けいただいている。教祖の大きなお慈悲にあふれる態度に接し、言いようのない感激、感謝の気持ちが信仰を強くし、今川は生涯、教祖のお慈悲にお応えさせていただけるようにと心に定め、勤めている。

## 「大阪の火事」

『大阪というところは、火事がよくいくところだすなあ。しかし、何んぼ火が燃えて来ても、ここまで来ても、ここで止まるということがあります。何んで止まるかと言うたら、風が変わりますのや。風が変わるから、火が止まりますのや。』と、御自分の指で線を引き、お話し下された。」と記されている。

「後に、明治二十三年九月五日（陰暦七月二十一日）新町大火の時、立売堀の真明組講社事務所にも猛火が迫って来たが、井筒講元以下一同が、熱誠こめてお願い勤めをしていたところ、裏の板塀が焼け落ちるのをさかいに、突然風向が変わり、真明組事務所だけが完全に焼け残った。聖次郎は、この時、教祖からお聞かせ頂いたお言葉を、感銘深く思い出したのであった。」と記され、逸話は結ばれている。

資料によると、当日の午前2時に北東の風6.9mの風が吹い

ており、午前3時頃に菓子屋から失火し、強い北東の風によって大火となっている。その後、10時には7.8mの東風に変化して、鎮火の方向に向かっている。

教祖のお言葉通り、風向きが変わる、風が止まることによって火の勢いも衰え、鎮火したのである。

## 3. 信仰的思案

今川が信心していた「法華経」は、飛鳥時代に聖徳太子が注釈書を撰述した『法華経義疏』などで教えが説かれ、その歴史は古い。仏教は解釈の相違からさまざまな宗派へと分派しているが、その中でわが国では最も流布した教えの一つが法華経である。その教えは、「一切衆生」を篤く説き、誰もが仏性を有し、成仏できることを示した教えである。

仏教の宗派の多さを表わす言葉に「8万4千の宗派」という言葉がある。それぞれの時代の中で仏教の教えを解釈し、開祖となった先人も数多い。「富士山は、頂上は一つやけども、登る道筋は幾筋もあり、どの道通っても同じやで」のお言葉は、山登りに例えて教示された教祖のお言葉である。それぞれが信心を深めて頂上に達する先には、この世界は、世界中の人間はみな「親神様の懐住まい」であり、人間は親神様のご守護によって生き、生かされていることを今川は教祖から教示されたのである。法華経を信心してきた今川にとっては、その教祖の一言、ひとことのお言葉は衝撃的な、心にしみるものであり、深く感激し、生かされている喜びに感動したことと推察する。

私自身の解釈であるが、ここ数年、新型コロナウイルスで世の中は、社会は一変している。信仰生活も大きく影響を受け、「にをいがけ」のあり方も、行事を行うことも、参拝もままならない事態が続いている。参拝のあり方を例にとっても、教会に参拝に行く、毎月26日の月次祭におぢばに帰り、神殿で参拝することもままならないのである。おぢばに帰り、神殿でかんろだいに一番近い所で参拝することもコロナウイルス禍ではできない状況下にある。

しかし、教会に日参する、教会本部の神殿に行って参拝する、月次祭におぢば帰りしたいと思っても、それが叶わない状況はコロナ禍だけではなく、実は以前からもあった。おぢばから遠い地域で生活しているようばく、信者にすれば、また身上の患いでベッドの上で日々を送っている人々からするなら、日参したいと思ってもなかなか叶わないことである。神殿に行き、かんろだいに一番近いところで参拝することが信仰者としてのあるべき姿だと思っていることも、実はそれがすべてではないのである。参拝のありかた、信仰のありかたは決して一つの姿だけではなく、人それぞれ置かれている環境によって大きく異なるものであり、それぞれが真摯に親神様、教祖の御心にすがって信仰し、教えにそって日々実践するならば「それもあるべき姿」の一つであると思う。

どんなところにおいても、どんな状況のなかにあっても、信仰は「登る道は幾筋も」のごとくである。親神様・教祖の教えをしつかり心に治め、信仰を追い求める姿は「百人百様」なのである。

親神様、教祖の道具衆として陽気ぐらしを日々実践する姿は、何からでも、どこからでも可能であることをこの逸話から思案する。

本書は、『〈新装版〉シェリング著作集』に収められた初期シェリングの大著の新訳である。『超越論的観念論の体系』は1800年に著され、1930年には赤松元通氏によって翻訳出版され、その後、1949年に再版された。『〈新装版〉シェリング著作集』を刊行した文屋秋栄によると、本著作集の特色は、シェリングの主要著作・論文を読み易く明快に翻訳したこと、研究水準の高い解説・注釈を加えたこと、3種の注記(原注、校訂注、訳注)をそれぞれ、本文中該当ページ脇(傍注)、巻末(尾注)に配置し、明確に区別したこと、原典(初版本と息子版)のページ数を欄外に付したことであるとしている。全6巻全12冊の構成は、以下の通りで、このうち、1a, 4a, 4b, 6a, 6b, 6c巻はすでに出版されており、第2巻は、7冊目ということになる。

- 1a巻 自我哲学/高山守編
- 1b巻 自然哲学/松山壽一編
- 2巻 超越論的観念論の体系/久保陽一・小田部胤久編(全訳)
- 3a巻 同一哲学/伊坂青司・加藤紫苑編
- 3b巻 芸術哲学/小田部胤久・八幡さくら・平井涼編(全訳化予定)
- 4a巻 自由の哲学/藤田正勝編
- 4b巻 歴史の哲学/藤田正勝・山口和子編
- 5a巻 神話の哲学〈上〉/大橋良介編
- 5b巻 神話の哲学〈下〉/大橋良介編
- 6a巻 啓示の哲学〈上〉/諸岡道比古編(全訳)
- 6b巻 啓示の哲学〈中〉/諸岡道比古編(全訳)
- 6c巻 啓示の哲学〈下〉/諸岡道比古編(全訳)

監修には西川富雄、渡邊二郎、神林恒道、相良憲一、田丸徳善の各氏が就き、編集幹事を松山壽一氏、高山守氏が担当している。文屋秋栄は編者の言葉として本著作集について次のように紹介している。

「そもそもなぜ何かがあるのか、なぜ何も無いのはいのか。」(『啓示の哲学』)

晩年、シェリングはこのように問うた。これは、今なおわれわれにとっても、究極の問いにほかならない。シェリングは18世紀後半から19世紀前半にかけての大思想運動であったドイツ観念論哲学の立役者にしてドイツ自然哲学の指導者、またドイツロマン派の文学や美学にも焔した多彩な思想家であったばかりでなく、自由と歴史、神話と啓示の問題を究極まで問い詰めた思索家でもあったが、その全貌がこの度の〈新装版〉シェリング著作集の刊行によってようやく明るみに出ることになった。

本著作集はシェリングの全生涯にわたる膨大な著作、遺稿の中から主要著作を厳選し、それらを信頼のおける翻訳によって読めるようにした本邦初の画期的な企てである。これによって、一般の読者は多彩かつ深遠な思想世界に誘われることであろうし、またドイツバイエルン科学アカデミー・シェリング全集刊行委員会の全面協力による初版テキストからの翻訳が可能となったことによって、シェリング哲学研究者や神学、宗教研究者のみならず、ロマン派文学や美学の研究者たちに対しても、地に足のついた思想史研究への道が開かれることになるであろう。

深谷太清、前田義郎、竹花洋佑、守津隆、植野公稔の5名が翻訳した第2巻の編集には久保陽一(序言)と小田部胤久(第

5章・第6章)の両氏があたり、本書の解説も担当している。その解説によると、若きシェリングの主著にして、フィヒテの『全知識学の基礎』とヘーゲルの『精神現象学』とを媒介する、ドイツ観念論の最重要著作であり、著者シェリングは「主観的なものを第一のもの、絶対的なものとみなし、そこから出発して、客観的なものを生ぜし

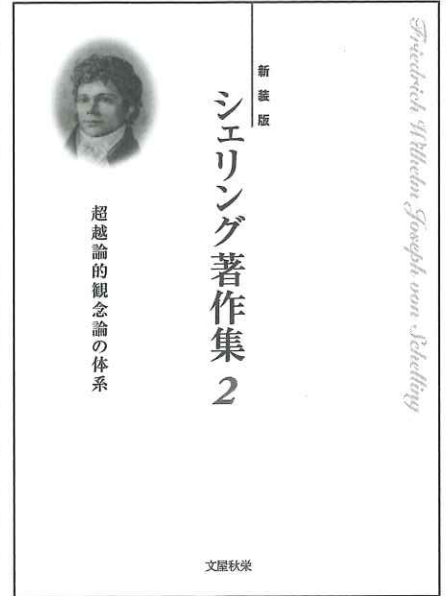
める」こと、換言すれば「特定の外界の物の存在」を「客観の現実的構成によって」もたらすことをめざした、という。「自然哲学」を体系的に補完する著作として知られ、翌年この体系と「自然哲学」とを統合した「同一哲学」を『わが哲学体系の叙述』において発表したとされる。『世界大百科事典』は、「『超越論的観念論の体系』(1801)は、観念と実在、実践と理論の総合を、人間精神の歩みが芸術に達する地点で果たそうとする。イェーナ期の後半では、『わが哲学体系の叙述』(1801)、《ブルーノ》(1802)等で、主客の根源的同一性を原理する〈同一哲学 Identitätsphilosophie〉を打ち出し、ヘーゲルに強い影響を与える。〈自我がすべてである〉というフィヒテ主義に代わって〈すべてが自我である〉と主張される。」と解説し、本書がシェリング初期哲学の集大成であると理解される。

2006年より天理大学で教えている深谷太清氏は、本書の緒論・第1章・第2章の翻訳を担当し、氏がミュンヘン大学に提出した博士論文『Anschauung des Absoluten in Schellings früher Philosophie(1794-1800)』(シェリング初期哲学における絶対者観)は後に出版されている。

本書は、テキストに、1800年に公刊された初版本を用い、1816年の第2版及び1858年の息子編全集の同書の異同等について、校訂注で明示している。訳者の弛まぬ研究の成果は、本文から見出しと思われる箇所を抜き出し読者の理解の助けとなる内容を補って目次としたことや、原注・校訂注・訳注が充実していることなどにあらわれているように思う。目次は以下の通り。

序言

- 第1章 超越論的観念論の原理について
- 第2章 超越論的観念論の一般的な演繹
- 第3章 超越論的観念論の諸根本命題に従った理論哲学の体系
- 第4章 超越論的観念論の諸根本命題に従った実践哲学の体系
- 第5章 超越論的観念論の諸根本命題に従った目的論の主要命題
- 第6章 哲学の普遍的道具の演繹、ないし超越論的観念論の諸根本命題に従った芸術の哲学の主要命題  
全体系への総注



日本南アジア学会第 35 回全国大会に参加

堀内 みどり

標記大会が、9月24日、25日に帝京大学八王子キャンパスを会場として開催された。共通論題として「新型コロナウイルスと南アジア」が開催校の三輪博樹帝京大学法学部教授を座長として企画され、佐藤創「インドにおける『ロックダウン』の法的根拠」、上池あつ子「医薬品のグローバルサプライチェーンの再編とインド」、日下部尚徳「成長と貧困のバングラデシュグローバル経済の末端で顕在化した社会基盤の脆弱性」、中村友香「ネパールにおける COVID-19 と生活世界の再編」、Udei Appuhanmilage 「Disciplining the Sick: The Military and Pandemic Governmentality in Sri Lanka」の発題があった。COVID-19 によって何が露わとなって、何が課題となっているかがそれぞれの生活世界との関連で述べられた。他に、パネル発表4、自由論題（個人）25の発表があった。また、24日の総会では、全国大会、事務局、選挙などのオンライン化の内容・実施などが報告され、会費納入のオンライン化に続き、学会運営のシステム再構築・簡便化のための方策が進んでいることが示された。

2022 年度第 2 回伝道研究会（10 月 20 日）

「ヨーロッパ出張所の現状と課題—2012 年以降の活動と御用環境の変化」

長谷川 善久

本研究会では、まず初めに、ヨーロッパ出張所、天理日仏文化協会、英国連絡所、またヨーロッパの各地に点在する教会、布教所、直属拠点や現在のヨーロッパの教勢についてそれぞれ簡単に紹介した。そのうち、出張所のさまざまな活動に関して、教化・教育、育成、つなぎ、においがけ、広報、社会活動、文化活動などの項目ごとに分けて説明した。

後半では、出張所創立 40 周年の際の真柱様のお言葉にみる出張所の使命について考察。出張所の使命とは何であるのか、その使命を達成するためにどのようなことが大切であるのか、現在の環境下において具体的にどのようなことを推し進めていくべきなのかなどについて常日頃考えていることを述べた。

質疑応答においては、現在抱えている、特に人材、財政、現地主導といった課題に関してどのような解決先があるのかなど、活発な意見交換が行われた。

2012 年にヨーロッパ出張所の所長を拝命してから 10 年以上が過ぎた。この研究会の発表を準備するなかで、これまでのフランスにおける自分自身の歩みや本部拠点の諸活動の歴史と現状を振り返るとともに、今後のヨーロッパ出張所の課題についても検討することができた。

宗教倫理学会第 23 回学術大会に参加

堀内 みどり

標記大会が 10 月 29 日オンラインで開催された。大会運営は事務局を中心にして行われ、堀内は後半 2 つの研究発表の司会を務めた。研究発表は 4 名だった。午後の公開講演会は、事前申し込みの手続きの上、オンラインで開催された。司会を氣多雅子会長が務め、鎌田東二京都大学名誉教授が「神道における場所と『世間』」と題して基調講演を行った。宮本要太郎関西大学教授と鬼頭葉子同志社大学准教授のコメント及び質問の後、参加者を交えての質疑応答となった。鎌田氏は「世間」とは「<sup>えな</sup>胞衣」のような被膜であるというのが、生命論的に見た世間観ではないかと考えるとした上で、『古事記』や『日本書紀』など豊富な資料を紐解き、こうした感覚や思考は、すでに『古事記』の国生み神話に端的に現れていると指摘した。そして、<sup>あらわ かくり</sup>顕と幽、場の宗教としての神道と神社や記紀神話や「草木言語」、天台本覚思想の「双木国土悉皆成仏」までに被膜連鎖があると述べた。さらに『古今和歌集』仮名序で紀貫之が展開した和歌の哲学にもこれを読み取ることができるとし、世間の理解にはこの胞衣的世間観のありようの意味を探る必要があると解説した。

## 2022 年度公開教学講座のご案内

### — 信仰に生きる『逸話篇』に学ぶ（8） —

2022 年度の公開教学講座は、オンラインで配信しております。

オンライン配信中

- 第 1 回 5 月 永尾教昭所長 151 話「をびや許し」
  - 第 2 回 6 月 澤井真研究員 111 話「朝、起こされるのと」
  - 第 3 回 9 月 岡田正彦研究員 139 話「フラフを立てて」
  - 第 4 回 10 月 八木三郎研究員 108 話「登る道は幾筋も」
  - 第 5 回 11 月 森洋明研究員 119 話「遠方から子供が」
- 今後の配信予定
- 第 6 回 1 月 堀内みどり主任 126 話「講社のめどに」

グローバル天理

第 23 巻 第 12 号（通巻 276 号）

2022 年（令和 4 年）12 月 1 日発行

© Oyasato Institute for the Study of Religion  
Tenri University

発行者 井上昭洋

編集発行 天理大学 おやさと研究所

〒 632-8510 奈良県天理市杣之内町 1050

TEL 0743-63-9080

FAX 0743-63-7255

URL <https://www.tenri-u.ac.jp/oyaken/index.html>

E-mail [oyaken@sta.tenri-u.ac.jp](mailto:oyaken@sta.tenri-u.ac.jp)

印刷 天理時報社

Printed in Japan